

# 明治四年・岡山県下津高郡農民騒擾裁判小考

中山 光勝

## 一 はしがき

先般、私は、手塚 豊編著『近代日本史の新研究』IX（平成三年・北樹出版）に「明治四年・岡山県下磐梨郡農民騒擾裁判小考」なる一文を発表し、さらに、杉山晴康編『裁判と法の歴史的展開』（平成四年・敬文堂）には「明治四年・岡山県下赤坂郡農民騒擾裁判小考」なる一文を発表した。前記の二論稿で取り上げた農民騒擾は、それぞれ明治四年十一月から同年十二月にかけて、岡山県下の磐梨、赤坂、津高および上道の四郡に発生した、いわゆる「悪田畑改正」に反対する一連の農民蜂起のひとつであり、他の二郡における騒擾ともども、多数の文献に取り上げられ、騒擾自体の概要などについては、今日では、一応明らかにされているものであった。けれども、これらの騒擾の司法的処理の過程については、必ずしも十分に解明されたとはいえない状況であった。そこで、私は、前記「二論稿」において、新たに発見した法務省法務図書館所蔵の関係資料を利用し、

それらの司法的処理の過程に重点をおいて、騒擾の概要を、紹介、考察したのであった。

その際、前記二論稿中の前者の「はしがき」の末尾に「本稿は、該資料（法務図書館所蔵の新資料たる『岡山県暴動一件』を指す——中山註）を利用し、右の騒擾に関する新たな事実を指摘せんとする私の第一弾である。紙幅の関係から今回取り上げることでできなかった他の三件の騒擾についても、日ならずして発表予定の続稿においてその責をはたしたいと思っている」と述べておいた。そして、その「責」の一斑を果さんがため、前記二論稿中の後者を発表したものであった。そこで、本稿は、いわばこれらの続編として、前記二論稿でふれることのできなかつたもののうち、津高郡における農民騒擾<sup>(2)</sup>を取り上げ、前記二論稿でも利用した法務省法務図書館所蔵にかかる『岡山県暴動一件』<sup>(3)</sup>などを利用し、その司法的処理の過程に重点をおいて、騒擾の概要を紹介、考察せんとするものである<sup>(4)</sup>。

(1) これらの農民騒擾を紹介したり、関係資料を翻刻、収録している文献については、拙稿「明治四年・岡山県における農民騒擾に関する裁判資料(一)」身延山短期大学学会『棲神』第六十二号(平成二年)一三六一―一三七頁、拙稿「明治四年・岡山県下磐梨郡農民騒擾裁判小考」手塚 豊編著『近代日本史の新研究』IX(平成三年)七〇頁および拙稿「明治四年・岡山県下赤坂郡農民騒擾裁判小考」杉山晴康編『裁判と法の歴史的展開』(平成四年)三七頁にその主なるものを列挙しておいた。

(2) (1) 挙示の拙稿において紹介した文献のうちで、年表類をのぞき本稿で取り上げる津高郡下の農民騒擾にふれているものに、全国農民組合岡山県連合会編『全農岡山闘争史 附岡山県百姓一揆覚書』(昭和十一年)四四―四五頁、金川町誌編纂委員会編『金川町史』(昭和三十二年)一六五―一六六頁、岡山県編『岡山県の歴史』(昭和三十七年)五二―五三頁、谷口澄夫『岡山藩政史の研究』(昭和三十九年)七五―七五五頁、岡山県編『岡山県政史』明治・大正編(昭和四十二年)二八―三〇頁、岡山市役所編『岡山市史』8 社会編(昭和四十三年)一二五頁、谷口澄夫『岡山県の歴史』県史シリーズ33(昭和四十五年)一五五―一五八頁、岡山大学教育学部社会科学教室内地域研究会『一宮町の歴史と現代』

地域研究第14集(昭和四十五年)一五三―一五四頁、片山峯吉編『馬屋下村史』三六〇―三六四頁(本書には、発行年月日の記載がないが、本書の「はしがき」に、「昭和四十六年二月」と記されているので、ここではとりあえず同年の発行と仮定しておく)、岡山県広報協会編『岡山県政百年の歩み』(昭和四十六年)二三頁、岡山県警察本部編『岡山県警察史』上巻(昭和五十年)九九五―九九八頁、蓬郷 巖『岡山の県政史』岡山文庫69(昭和五十一年)二六頁、柴田 一・朝森 要編『郷土史事典 岡山県』(昭和五十五年)一七一―一七二頁、太田健一『日本地主制成立過程の研究』(昭和五十六年)二七九―二八五頁、太田健一「明治四年岡山藩悪田畑改正の考察」谷口澄夫先生古稀記念事業会編『歴史と風土』(昭和五十八年)二二四―二二六頁、岡山県史編纂委員会編『岡山県史』第十巻・近代I(昭和六十年)四四―四七頁、御津町編『御津町史』(昭和六十年)四二―四四頁、柴田 一・太田健一『岡山県の百年』県民100年史33(昭和六十年)五三―五七頁などがあり、また、土屋喬雄・小野道雄編『明治初年農民騒擾録』(昭和二十八年)三三〇―三三一頁および三三三―三三六頁、長光徳和編『備前・備中・美作百姓一揆史料』第五巻(昭和五十三年)一八九九―一九〇〇頁および一九〇五―一九〇七頁には、『公文録』、『太政類典』および『岡山県史料』などより関係資料が翻刻、収録されて

いる。

(3) 本稿で利用するものは、「明治五年・第四号・岡山県備前國津高郡河内村之内山條農吉村新三外七名貢米十分一納願出可ク多人数寄合遂ニ同郡辛香村里正中山辰四郎外二名宅へ懸ケ家財打碎又ハ放火及ヒシニ付処刑方且新三八同囚破牢ノ企アルヲ密告セシニ依リ死一等ヲ減ス可キヤノ件」なる文書であり、その内容は、明治五年六月(日欠)附で、岡山県が、司法省に提出した「備前國津高郡河内村之内山條<sup>(ト)</sup>百姓吉村新三外七人御仕置伺書」(この処刑伺には、宛名がないが、後述の明治五年九月二十四日附「備前國津高郡河内村之内山條<sup>(ト)</sup>百姓吉村新三御仕置伺書」および別件ではあるが、同じ司法省旧藏文書である『岡山県暴動一件』に収録されている明治五年九月二十四日附「備前國津高郡田地子村百姓田原小四郎外拾八人御仕置伺書」の宛名が、ともに「江藤司法卿」および「福岡司法大輔」となっていることおよびこの処刑伺に対する回答と思われる後述の司法省指令が添付されていること、さらに、国立公文書館蔵『太政類典』第二編第四百十八巻・保民十七・警察五に収録されている「二十一・岡山縣下人民動揺始末書并官員待罪」にみえる明治五年七月十三日、岡山県から太政官に提出された伺書中に、「昨辛未年十一月当縣管下在郷ノ者共及動揺候儀ニ付追々取調吟味口書類ハ此度司法省へ差出刑相伺置候儀ニ御座候」とあることなどから考え、

明治四年・岡山県下津高郡農民騒擾裁判小考(中山)

司法省もしくは司法卿ないし司法大輔宛に提出されたものであろう。なお、国立公文書館蔵『岡山県史料』四十三・縣治紀事に収録されている「騒擾」の項にも前掲「二十一・岡山縣下人民動揺始末書并官員待罪」と同一内容の伺書がみえるが、その日附は、「壬申六月」である。および明治五年九月二十四日附で、岡山県が、江藤司法卿・福岡司法大輔宛に提出した「備前國津高郡河内村之内山條<sup>(ト)</sup>百姓吉村新三御仕置伺書」ならびにこれらに対する明治五年十月二十四日附の司法省指令(文書の内容が岡山県伺に対応するものであること、文書の末尾に後述の如き司法省の官員の捺印があること、さらに、用紙が、司法省の赤色八行罫紙であることなどからみて、司法省指令であることは確かであろう)であり、さらに、これらの処刑伺書には、吉村新三以下八名の事件関係者が、岡山県に提出した口供書が添付されている。ちなみに、これらの資料は、拙稿「明治四年・岡山県における農民騒擾に関する裁判資料四」身延山短期大学学会『棲神』第六十五号(平成五年)一七二—一八三頁にその全文を翻刻しておいた。

(4) 本稿における資料の引用に際しては、漢字は、人名・地名をのぞき現代一般に使用されているものに改め、合字、変体仮名についても普通のものに改め、また、新律綱領の引用にあたっては、官版『新律綱領』を用い、傍註などのルビはこれをばいいた。なお、本書については、手塚 豊「新律綱領、

改定律例註釈書」慶應義塾大学法学研究会『法学研究』第三十八卷四号（昭和四十年）七五頁『明治刑法史の研究（上）』手塚 豊著作集 第四卷（昭和五十九年）一八四—一八五頁参照。

## 二 騒擾の概略とその裁判

明治四（一八七二）年一月から同年十一月にかけて岡山県下において実施されたいわゆる「悪田畑改正」作業は、旧藩時代の「密ニシテ且酷ナル」税制を改め、税負担を公平にし、それが軽減化を企図したものであったが、その結果は「而シテ大ニ税額ヲ減スルニ至ラ」ざるものであった。<sup>(3)</sup>さらに、「悪田畑改正」の結果、「所有スルニ堪ユヘキノ税額ニ改正」された田畑が投票公売で落札される過程で、かなり意図的かつ集中的に地主や豪農層の手に集約されたといわれることなどを考えあわせると、小農民や零細貧農層にとっては、これは、改正というよりもむしろ改悪と言ふべきものであったと言えよう。

かかる状況下において、明治四年十一月二十五日に発生した磐梨郡下の農民騒擾は、同二十八日には赤坂郡下の諸村にも波及し、翌十二月三日には津高郡下の諸村にも波及し、同日「夕五時頃津高郡河内村ノ内山條富谷始外式拾五六箇村凡千三百人一時ニ動立チ同夕九時頃同郡辛香村里正中山辰四郎宅へ押掛ケ立具諸道具少々箆筒

等打毀乱妨相働」<sup>(7)</sup>くが如き状況にまで立ち至った。

この間の事情について、津高郡下の騒擾の首謀者と目され逮捕された津高郡河内村の農民吉村新三は、明治五年三月十五日、岡山県の取調べに対し、次の如く供述している。<sup>(8)</sup>

昨未年（明治四年——中山註）十一月下旬ヨリ磐梨赤坂両郡村々動揺之趣承リ居申折柄同十二月二日津高郡金川村へ罷出帰リ掛ケ同郡河内村之内富谷百姓逢坂熊八方へ立寄候処同人申出候ハ赤坂郡内動揺出訴致し御年貢米上納十分一ニ相成候様願置致し候趣相咄候付出願不致而者難相叶当辺ヨリも出訴可致様私ヨリ申聞候処熊八相答候ハ一同之義ニ候得ハ訴可致旨申候ニ付其俣婦居申出翌三日朝四ツ時頃隣家百姓竹谷槌蔵私門前ニ而出会同人申出候者赤坂郡ハ動揺致し御年貢米十分一相成候様願上候趣就而者当村も難渡不少に付御年貢米上納十分一ニ相成候様出願致し候而者如何哉と槌蔵ヨリ相咄候ニ付前条熊八出会候節之手続相咄罷在候折柄村内百姓寺門石太郎同吉村林之次通り掛ケ候付右之趣私ヨリ申談置直ニ私義ハ隣村母谷用向有之罷出候節途中ニ而不図同村百姓江見喜十郎ニ出逢右赤坂郡内動揺致し御年貢米十分一願上候趣相咄し立別連一旦母谷へ罷越婦宅仕候同夕隣家百姓寺門久米吉方へ入湯ニ参リ居申出候村方野間ニ而多人数相集リ火を焚キ貝吹立居申ニ付誘引不致共一時ニ多人数ニ相成夫ヨリ南隣村小山村之方へ一同押行私義も附随ひ同郡辛香村へ相越候処同村里正中山辰四郎宅他村之者多人数相越家財

打毀乱暴仕居申候付私共も夫ヨリ猶又同郡菅野村大里正坂野倭  
三二殿宅へ一同之者罷越私義ハ同家門内ニ而休息一飯を請

また、吉村と同じく騒擾において中心的役割を演じたと目された  
同所の農民竹谷槌蔵も、明治五年三月十五日、岡山県の取調べに對  
し、次の如く供述している<sup>(9)</sup>。

昨未年（明治四年——中山註）十二月朔日母義不快居申候付私  
叔父赤坂郡西中村百姓岸田染太郎見廻ニ罷越候ニ付同郡内先般  
動揺致し候一条如何様之訳柄ニ候哉と相尋候処上郷村々ヨリ押  
懸ケ参リ不随者者居宅打毀チ候様申誘引致し候所ヨリ多人數  
ニ相成御年貢米十分一二相成候様願立候趣被囑同人義翌二日朝  
罷帰申候然ル所昨未春已來村方田畑御改正ニ付私御年貢米従前  
より六斗四升計リ多分払上候様相成難渋ニ付兼而何と欺相願度  
折柄右之咄承知仕候間同三日朝四ツ時頃村内百姓吉村新三ニ出  
逢前条之次第相咄此最寄ニも十分一願上候而者如何哉と私ヨリ  
申談し候処可然旨申尤同人義者最早前日同郡河内村之内富谷百  
姓逢坂熊八<sup>ハ</sup>出訴可致様及談示居申候旨相咄罷在候折柄村内百  
姓寺門石太郎同吉村林之次通り掛リ候付新三ヨリ兩人へも右之  
趣咄し合相別レ私ヨリも村内最寄之者者不取敢伝置申候私義  
同夕六ツ半時迄隣家<sup>ハ</sup>人湯ニ参リ帰宅懸ケ唯今ヨリ出訴可致旨  
喚立置一旦帰宅仕簀笠ヲ着杖ヲ携村方野間へ立出候処近郷村々  
之者共統々罷越竹貝吹立火ヲ焚居申候処一時多人數ニ相成申候  
前条之外談し合致し候義ニ而者無御座候得共村々之者共人氣立

候処ヨリ歟一時ニ多人數ニ相成直ニ一同下筋村々<sup>ハ</sup>押行既ニ先  
立候村々之者共同郡辛香村里正中山辰四郎宅へ相越及乱暴夫ヨ  
リ同郡菅野村大里正坂野倭三二殿方へ罷越候処最早多勢同家へ  
参リ居申私義ハ同家ニ而一飯ヲ請ひ休息致

さて、蜂起し、群集と化した農民は、翌四日早朝には、「同郡大  
里正菅野村<sup>（マヤ）</sup>阪野倭三二田村百姓坂野鉄次郎宅ニテ一飯ヲ請ヒ夫ヨリ  
南ノ方口分へ押出右道筋辛香村始村々百姓共誘出シ同郡横井上村ノ  
内字白玉ト申処酒造家ニテ同六ツ半時頃飲食致居」との状況であり、  
この旨の報知を受けた岡山県は、即時に「租税掛寺崎金八郎吉川渡」  
の兩名を現場に派遣したが、群集はすでにその場を立ち去った後で  
あった<sup>(10)</sup>。その後も群集は、「道筋横井上村始村々百姓共誘出シ同日  
五時過同郡大里正下芳賀今井郁太郎宅へ押掛ケ立具等打碎家財諸道  
具等不殘門内へ投出シ悉焼捨宅舎長屋共柱疊壁等へ疵付夫ヨリ下芳  
賀始村々百姓共附随ヒ野合ニ積置候藁等焼立多人數押出候趣」にま  
で騒擾は拡大していった<sup>(11)</sup>。

さて、事態の急変に驚愕した岡山県は、これが収拾のため、「大  
属渡邊能靜小隊長森鉄太郎隊同道同郡首村へ」派遣したが、「最早  
一同南口分へ押行候総人數凡二千余人同日八時頃同郡大里正白石村  
深井文平宅へ押掛ケ放火及乱妨候ニ付渡邊能靜權大属平野伴則吉川  
渡直ニ駈付及理解候へ共鎮靜不仕弥引取不申候へハ不得止搏払可申  
旨申聞候ヘトモ更ニ相止候勢無之」というが如き状況となった<sup>(12)</sup>。

四日以後の状況について、前述の吉村新三は、次の如く供述して

いる。<sup>(13)</sup>

四日晩一同之者同所立出同郡横井上村字白玉酒造家へ参り候処多勢之中ニ者満腹之者共有之私義者同家ニ而尚又一飯を請ひ夫ヨリ村々之者共同郡下芳賀大里正今井郁太郎殿方へ罷越頻リニ乱暴仕居申候へ共私義ハ手ヲ着不申夫ヨリ同郡一宮へ参り同所ニ止り居申候処出先村々之者共最早同郡白石村まで押行同村大里正深井文平殿宅放火致し既ニ銃隊御差向御搏拵相成候由ニ而多人數之者共一宮村迄逃歸り候付右始末承

かくて暴徒と化した群集は、「此假差置候テハ波及伝染此上如何様ノ大害ヲ生シ候モ難計勢」にまで膨張したため、岡山県は、これが鎮庄のため、「出先役員申談」の結果、「森鎮太郎隊」に「砲発」を命ずるに至り、この結果、「即死五人手負五人有之依之其場へ集居申者トモハ一時散乱」するに至ったが、その後も「多人數ノ儀故起伏難計ニ付直ニ追掛ケ同日七半時頃同郡一宮村迄追詰」めるまでに至った。<sup>(14)</sup>その後、群集が追詰められた一宮村において、蜂起以來、農民の説得にあたっていた岡山県の大属渡邊能靜、権大属平野伴則および租税掛吉川 渡等に加え、「聴断掛少属徳田明誠罷越俱々一同へ対シ早々引取願筋等有之候ハ、追テ総代ヲ以可申出尚此上鎮靜不致候ハ、処置振リモ可有之旨申聞候処同夕五時頃夫々引取」り、騒擾はひとまず鎮靜することとなった。<sup>(15)</sup>

この間の事情について、前述の吉村新三は、次の如く供述している。<sup>(16)</sup>

同所（一宮村——中山莊）へ租税御懸り渡邊大属様同平野権大属様御出張願之筋可申出旨被仰聞母谷喜十郎私共菅野村組合為惣代願置之趣申上候処種々御説諭之上私共ヨリ双方理解いたし俱々引取候様被仰聞孰連も直ニ引取候

しかし、その後も、「兎角流言甚敷人氣不穩ニ付役員共所々廻村鎮撫」した結果、「同六日迄ニ一同帰縣」することができ、ここに騒擾は完全に鎮靜するにいたった。<sup>(17)</sup>そこで、岡山県は、十二月十二日、事件の経過をとりあえず太政官に報告すべく、太政官の秘書部局とでもいうべき「内史」および「外史」からなる「史官」宛に、次の如く届け出ている。<sup>(18)</sup>

別紙ノ通今般縣地ヨリ申越候ヘトモ委細ノ儀不申越候間尚申越次第書上可申候此段不取敢御届申上候以上

辛未十二月十二日 岡山縣

史官 御中

#### 当縣下村民徒党事件御届

当縣管内備前國赤坂郡ノ内村民トモ結党去月季ヨリ各所囂集恣ニ民家へ乱入シ器物ヲ焚毀スル等ノ挙動ニ及ヒ候故早速役員ノ者トモ出張説諭相加取鎮候処引統磐梨上道津高三郡ノ者トモ同様ノ挙動相企往々里正トモノ居宅ヲ焚毀スル等ノ暴動ニ及ヒ候ニ付不得止兵隊操出発炮為致候処死傷凡九名余ハ即時散乱仕候右ノ事情ニ候故元権大參事初役員ノ者トモ各所巡行御撫恤ノ御

深意ヲ以精々説諭ニ及ヒ居申候

死傷人名左ノ通

傷

國光財治

同郡横井上村平民

津高郡下芳賀村

入江林平内別惣次郎倅

平民

傷

入江元藏

死

板野滝三

同郡大岩村

同郡白石村

傷

順吉

平民

死

升三郎

右ノ通申越候死傷モ有之儀ニ付不取敢御届申上候尚委細ノ儀ハ追テ取調書上可申候以上

同郡花尻村平民

辛未十二月十二日

岡山縣

則武勝五郎倅

史官御中

死

則武嘉五郎

同郡管野村ノ内西管野

平民

死

島村三造

同郡富原村平民

その後、郡下の村役人より歎願書が差し出されたようであるが、これを披見した岡山県では、「一々難筋立儀ニ付」との理由で、十三日、「渡邊能靜租税監督辻富四郎租税掛杉原平太郎吉川渡」の四名を、郡下の「菅野金川村中田村」に出張させ、「近傍村々百姓總代呼寄歎願書」を差し返したうえで、次の如く回答した。<sup>(19)</sup>

金藤彌三郎弟

一 知事様御復職ノ事

死

金藤周吉

同郡白石村平民

知事免職ノ儀ハ諸一同ノ儀ニテ朝廷深キ思召被為在候御事御時勢不相弁者ニテハ一応尤ノ情実ニ候へ共更ニ願出候訳ニ無之候間能々御布告ノ御主意ヲ相并可申事

秀次郎

一 知事様御家禄十分一ニ相成候上ハ御年貢十分一相納度事

傷

母

同郡中原村

租税ノ儀ハ元來朝廷ノ御物ナルヲ數百年武家私有ノ姿ニ

平民

相成居申夫迎國守耆人ノ私有ニハ無之矢張治民ノ用途ニ

明治四年・岡山県下津高郡農民騒擾裁判小考（中山）

相充候事ニ有之今般御改革版籍奉還相成候ハ至当ノ御事  
決テ知事様并士族ノ家禄ニ拘リ候儀ニハ無之甚以心得違  
不当ノ申立ニ候条早々例ノ通収納可致事

# 一 田畑改正ニ付難渋ノ向有之事

藩ノ適宜ヲ以加損ト唱ヘ遣来候処往々下方ノ煩ヒニ相成  
候故御仁恤ノ御改正ニ有之候間決テ難渋ノ向ハ聊無之筈  
ニ候万一調達等ニテ実々難渋ノ向有之候ハ、其者ニ限り  
歎願可致筈ノ処連印等ニテ一同申立候儀ハ甚以心得違ノ  
至ニ候事

# 一 義倉廃止ノ事

組合融通ニ取建遺候事故篤ト組合談合ノ上申出候ヘハ相

止候モ勝手次第ノ事

# 一 夫口糠藁代御免ノ事

此頃伺中ニ候条追テ何分ノ御沙汰可有之事

この回答に対し、召集された「百姓総代」も、「腰書ノ通理解」  
したこともあって、県より派遣された渡邊能靜以下四名も、十五日  
には、帰県し、ここに騒擾は完全に終息し、事後の処理を残すのみ  
となった。

さて、騒擾関係者の逮捕、取調べの方は、騒擾鎮定直後から着手  
されたものと思われるが、明治五年二月十五日に「御捕押懸牢三番  
へ入牢被仰付」れた吉村新三<sup>(21)</sup>の外は、資料を欠き不明である。それ  
はともあれ、逮捕された容疑者に対する岡山県の取調べの方は順調

に行われた模様で、翌明治五年三月十五日には、「津高郡河内村之  
内山条」の吉村新三および同所の竹谷槌蔵が、また、同二十五日  
には、同所の吉村林之次、寺門石太郎、「同村之内富谷」の逢坂熊八  
および「同村之内母谷」の江見喜十郎が、さらに、同四月三日には、  
「同村之内山条」の寺門久米吉および赤坂郡西中村の岸田染太郎が、  
それぞれ岡山県の「断獄御役所」において行った供述をもとに作成  
された「口書」が完成した。<sup>(22)</sup>

容疑者の自白をえた岡山県は、六月（日欠）、「備前國津高郡河内  
村之内山条<sup>(21)</sup>百姓吉村新三外七人御仕置伺書」を、次の如く司法省に  
提出した。<sup>(23)</sup>

備前國津高郡河内村之内山条<sup>(21)</sup>百姓吉村新三外七人吟味仕候処左  
之通

備前國津高郡河内村之内山条<sup>(21)</sup>百姓

吉村新三

申三十九歳

右吉村新三義村方百姓竹谷槌蔵寺門石太郎吉村林之次同村之内  
富谷百姓逢坂熊八其外之者共其出訴歎願之義申談去辛未年十二  
月三日夕近隣村々百姓共為出訴一時ニ騒立新三義も罷越遂ニ同  
郡村々波及多人數ニ相成同郡辛香村里正中山辰四郎同郡大里  
正下芳賀今井郁太郎宅へ押懸家財諸道具共打碎同郡大里正白石  
村深井文平宅放火および候右乱暴之節新三義ハ手ヲ着不居申且  
赤坂郡村々動揺し貢米十分一ヲ願候旨右槌蔵ヨリ承り候<sup>(24)</sup>雖モ



前条徒党相企候始末不届ニ付紋罪可申付哉

備前國津高郡河内村之内山条百姓<sup>(ママ)</sup>

銀三郎倅

竹谷槌藏

申三十五歳

右竹谷槌藏義赤坂郡村々動揺致し貢米十分一願出候由承り村内百姓吉村新三吉村林之次寺門石太郎其外之者共へ右同様出訴歎願之義申談去辛未年十二月三日夕端立村方之者共誘出候処近郷村々一時ニ騒立遂ニ同郡村々へ波及多人數ニ相成同郡辛香村里正中山辰四郎同郡大里正下芳賀今井郁太郎宅<sup>ニ</sup>押懸家財諸道具共打碎又ハ焼捨同郡大里正白石村深井文平宅及放火候右乱暴之節槌藏義ハ手ヲ着不居申候へ共前条徒党相企出訴致し候始末不届ニ付絞罪可申付哉

備前國津高郡河内村之内山条百姓<sup>(ママ)</sup>

吉村林之次

申三十一歳

寺門石太郎

申四十歳

右吉村林之次寺門石太郎義付内百姓吉村新三竹谷槌藏ヨリ出訴歎願之義示談ニ預り林之次義ハ村方之者へも申伝へ去辛未年十

二月三日夕近郷村々百姓共為出訴騒立候節兩人共罷越遂ニ同郡村々<sup>ニ</sup>波及外多人數ニおゐてハ諸所乱暴致し候右乱暴之節兩人とも相交り不居申ニ付附隨ニヨリ無罪ニ可有御座哉

備前國津高郡河内村之内富谷百姓

逢坂熊八

申三十八歳

右逢坂熊八義同郡河内村之内山条<sup>(ママ)</sup>百姓吉村新三ヨリ出訴歎願之義申談候節同意ニも無之去辛未年十二月三日夕近郷村々百姓共為出訴騒立候節一旦立出候得共眼病ニ而途中ヨリ罷帰候付外多人數之者乱暴相働候節右熊八義ハ相交り不居申ニ付附隨ニ依リ無罪ニ可有御座哉

備前國津高郡河内村之内母谷百姓

江見喜十郎

申四十二歳

右江見喜十郎義同郡河内村之内山条<sup>(ママ)</sup>百姓吉村新三ニ出逢候節赤坂郡村々動揺之咄し承り去辛未年十二月三日夕村々百姓共為出訴一時騒立候節罷越遂ニ外村々<sup>ニ</sup>波及多人數乱暴相働候得共右喜十郎義其節相交不居申ニ付附隨ニ依リ無罪ニ可有御座哉

備前國津高郡河内村之内山条百姓<sup>(ママ)</sup>

寺門 久米吉

申四十一歳

右寺門久米吉義村内百姓吉村新三入湯ニ参居申処近隣村々百姓共騒立候節兩人同道罷越遂ニ外村々<sup>ニ</sup>波及外多人数おゐてハ乱暴相働候得共右久米吉義ハ相交不居申ニ付附随ニ依リ無罪ニ可有御座哉

備前國赤坂郡西中村百姓

岸田 染太郎

申五十九歳

右岸田染太郎義去辛未年十二月朔日津高郡河内村之内山<sup>(マヤ)</sup>桑百姓竹谷槌藏兼而親類ニ付同人母病氣ニ罷在右見舞<sup>ヲ</sup>して罷越候節槌藏義赤坂郡村々動揺之始末相尋候付村々動揺致し御年貢米十分一相成候様歎願致し候由相咄候処ヨリ其後槌藏義村方之者申談津高郡村々動揺及候得共右染太郎義無何心相咄候趣ニ有之且同人義赤坂郡村々動揺之節相交リ不居申ニ付無罪ニ可有御座哉右之通ニ御座候御仕置之義別帳口書七冊并手続書三冊共相添此段相伺申候已上

明治五年壬申六月 岡山縣

なお、これと前後は不明であるが、同じ六月(日欠)中に、今回の岡山県下四郡の騒擾の鎮定にあつた岡山県の官員より、岡山県宛に、次の如き進退伺が提出されている。<sup>(24)</sup>

昨辛未年十一月廢縣被仰出候後御沙汰ノ通旧貫ノ御用取扱罷在當時ノ官員於東京拜命未着縣無之際同月御管内在野之者共勿謂義申立一時動揺及乱暴候ニ付其節不取敢御届申上候通甚以不埒ノ至奉存候然ル処右ハ全ク私共兼而教諭方不行届ヨリ不都合出来ニ相当リ深ク奉恐入候依之前頭動揺ノ始末書相添進退之儀奉伺候間宜様御取計之程奉頼候以上

壬申六月

その後、七月十三日、岡山県は、この官員進退伺とともに岡山県下の津高郡以下四郡の騒擾始末書(前掲「二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣權大參事成田元美・中村正記備前國津高郡赤坂郡磐梨郡上道郡村々出訴動揺始末書」と同一内容のもの)を、次の如き伺書とともに、太政官に進達した。<sup>(25)</sup>

昨辛未年十一月当縣管下在郷ノ者共及動揺候儀ニ付追々取調吟味口書類ハ此度司法省へ差出刑相伺置候儀ニ御座候就テハ旧官員トモ進退伺并右動揺ノ始末書等差出候間何分ノ御沙汰奉伺候以上

同日、太政官は、司法省に対し、次の如く達した。<sup>(26)</sup>

昨辛未年十一月中旧岡山縣管下動揺ノ儀ニ付旧大參事始末書ヲ以テ進退伺出候間取調処分可有之候也

この太政官の指示に対する司法省の対応を示す直接的資料は不明であるが、前掲『岡山縣史料』四十三・縣治紀事の「騒擾」の項に、「同年(明治五年——中山註)八月司法省ヨリ旧官員ハ無構旨達セ

ラレ」とみえるところから、進退伺を提出した官員が処罰されることはなかった模様である。<sup>(27)</sup>

ところで、時間的には前後するが、吉村新三については、先に岡山県が司法省に提出した処刑伺を變更する必要があるようである。それは、明治五年六月二十三日深夜（後述の吉村の供述によれば、二十三日の「晩七ツ時頃」とされるので、正確には、翌二十四日の未明ということになる）、收監中の吉村が、同囚の守屋喜右衛門などの脱獄計画を密告したことに端を発したものであった。このときの様子について、吉村は、明治五年七月二日、岡山県の取調べに對し、次の如く供述している。<sup>(28)</sup>

昨辛未年十二月中同郡（津高郡——中山註）村々動揺之義ニ付  
当二月十五日御捕押懸牢三番へ入牢被仰付罷在候処同六月五日  
一番へ転牢相成居申候然ル処同月廿日頃ヨリ相牢之内備前國賀  
陽郡板倉村出生守屋喜右衛門大坂信濃橋通り信濃町紀伊國屋平  
三郎河内國出生豊松等連立何廉密ニ示談仕候付破牢之企ニも可  
有之哉懸念罷在候処同廿三日右喜右衛門ヨリ何卒破牢脱出致  
し度ニ付同意致し呉候ハ、相牢之者共不殘同意之旨申聞候付追  
而返答可及旨申出候処尚又津高郡田地子村御百姓大頭鉄五郎ヨ  
リ破牢之義如何相考候哉申候付一同之義ニ候ハ、同意可致旨  
申答置一同之源意相察候処猶予仕候而ハ即夜破牢致し候も難斗  
様相考甚恐入候義存罷在候中同晩七ツ時頃御番人様御見廻り  
御座候付不取敢破牢之企有之段申上候

明治四年・岡山県下津高郡農民騒擾裁判小考（中山）

この吉村の供述に疑問を懷いた岡山県の取調当局は、「斯ル所業有之故訴出雖其方おゐても真以同意致し置反復之者ニ可有之不包申出候様」と、厳しく尋問したようであるが、吉村は、前述の供述の通りであり、「決而同意不仕義ニ御座候」と返答したようである。<sup>(29)</sup> その結果、岡山県当局も、それ以上の追及は、これを諦め、明治五年七月二日には、吉村が、岡山県の「断獄御役所」において行った供述をもとに作成された「口書」が完成するに至った。<sup>(30)</sup>

吉村の自白をえた岡山県は、同年九月二十四日、「備前國津高郡河内村之内山条百姓吉村新三御仕置伺書」を、次の如く司法卿江藤新平・司法大輔福岡孝弟宛に提出し、同囚の脱獄計画の密告の功を認め、刑の減輕を求めた。<sup>(31)</sup>

備前國津高郡河内村之内山条<sup>(マ)</sup>百姓吉村新三吟味仕候処左之通  
吉村 新三

申三十九歳

右吉村新三義村方百姓竹谷槌藏寺門石太郎吉村林之次同村之内  
富谷百姓逢坂熊八其外之者共へ出訴歎願之義申談去辛未年十二  
月三日夕近隣村々百姓共為出訴一時ニ騒立新三義も罷越遂ニ同  
郡村々へ波及多人數ニ相成り同郡辛香村里正中山辰四郎同郡大  
里正下芳賀今井郁太郎宅へ押懸ヶ家財諸道具共打碎同郡大里正  
白石村深井文平宅放火及び候右乱暴之節新三義ハ手ヲ着不居申  
且赤坂郡村々動揺貢米十分一ヲ願候旨右槌<sup>(マ)</sup>三ヨリ承候処ヨリ心  
得違候ト雖前条徒党相企候始末不届ニ付絞罪可申付哉之旨先般

口書相添伺中当六月廿三日相牢之内備中國賀陽郡板倉村守屋喜右衛門其外之者共破牢相企罷在候旨右新三義訴出ニ付減死一等准流十年可申付哉

右之通ニ御座候御仕置之義別帳口書一冊相添此段相同伺申候已上

明治五年壬申九月廿四日 岡山縣

江藤司法卿殿

福岡司法大輔殿

さて、岡山県より騒擾関係者の処刑伺を上申された司法省は、十月二十四日、次の如き量刑指令を、岡山県に申達した。<sup>(32)</sup>

両人赤坂郡ノ挙動ヲ聞キ本村モ之ニ倣ラヒ貢米十分一上納ヲ出願スル方然ルヘシト他村ノ多衆ニ附随シ大里正迄願出ルト雖モ其説論を聞テ承服退散ス依テ新条例聚衆搆訟抗官ノ兇徒ヲ以テ論シ難シ唯一村ノ首トナリ多人數ヲ以テ出願スルハ掲榜徒党ノ禁ヲ犯スヲ以テ違制ノ罪ニ擬シ杖一百ノ処同囚ノ破牢ヲ訴ルニヨリ一等ヲ減シ

懲役九十日

同上違制ニ擬シ杖一百

同上附和隨行違令輕答三十

吉村新三

竹谷槌藏

吉村林之次

寺門石太郎

贈罪金二両一分ツ、

逢坂熊八

江見喜十郎

寺門久米吉

伺之通

無罪

岸田染太郎

縣 青木 松本 松岡 江藤 判読不能

この司法省指令を分析すれば、次の如きことが言えるであろう。

(一) まず、吉村新三の量刑に関する司法省指令は、当時、現行刑法として頒布、施行されていた新律綱領の中の農民騒擾に対処するために設けられたとされる賊盜律・兇徒聚衆条の条項<sup>(33)</sup>によることなく、それが改正・補充法の草案として準備されつつあった新律条例<sup>(34)</sup>の条項に依拠していた可能性の-high ことが指摘できよう。すなわち、新律条例（第一次草案）第二百九十条（雜犯律・違令附例）の中の「凡制ニ違フ者ハ杖一百」なる規定により、まず「杖一百」を選択したうえで、これに、收監中に同囚の脱獄計画を密告し、事前に防止したことを考慮し、新律条例（第一次草案）第三百一条（捕亡律・獄囚脱檻及反獄逃走附例）の中の「反獄ノ情ヲ知テ首報スル者斬絞以下各本罪一等ヲ減ス」なる規定および新律綱領・名例律上・加減罪例条第二項の中の「減ト称スル者ハ。本罪上ニ就テ減輕ス。仮令ハ。答五十ヲ犯スニ。一等ヲ減スレハ。答四十二坐……スルノ類」なる規定を順次適用し、「本罪」たる「杖一百」から「二等」を減輕した「杖九十」を量定し、さらに、明治五年四月（日欠）・太政

官第百十三号布告をもって頒布されたいわゆる「懲役法」を適用し、その「懲役図」にしたがって、「杖九十」を「懲役九十日」と量刑した（前掲『法規分類大全』第五十四卷・刑法律門一・刑法律門二・刑律二・一九八一―一九九頁）か、それとも、新律条例（第一次草案）第二百九十条の前掲規定、同・第三百一条の前掲規定および新律綱領・名例律上・加減罪例条第二項の前掲規定を、順次適用し、「杖九十」を選択したのち、新律条例（第一次草案）第二条（名例律・五刑附例）の中の「凡犯罪答杖ニ該ル者ハ一体ニ打決ヲ廃シ答杖一等毎トニ日数十日ニ折シ……懲役ニ換フ……杖……九十」懲役九十日」なる規定を適用し、「杖九十」を「懲役九十日」と量刑したかのいずれかであろう。

(二) つぎに、竹谷槌蔵の量刑に関する司法省指令も、新律条例の条項に依拠していたものといえよう。すなわち、吉村新三と同様に、まず、新律条例（第一次草案）第二百九十条（雜犯律・違令附例）の中の「凡制ニ違フ者ハ杖一百」なる規定により、「杖一百」を選択した後、ついで、いわゆる「懲役法」を適用しその「懲役図」にしたがって、「杖一百」を「懲役一百日」と量刑したか、それとも、前述の吉村の場合と同様に「杖一百」を選択した後、新律条例（第一次草案）第二条（名例律・五刑附例）の中の「凡犯罪答杖ニ該ル者ハ一体ニ打決ヲ廃シ答杖一等毎トニ日数十日ニ折シ……懲役ニ換フ……杖……一百」懲役百日」なる規定を適用し、「杖一百」を「懲役一百日」と量刑したのであろう。

(三) さらに、吉村林之次、寺門石太郎、逢坂熊八、江見喜十郎および寺門久米吉の五名の量刑に関する司法省指令は、これらの五名を、前述の吉村および竹谷の単なる「附和随行者」と認定し、新律条例（第一次草案）第二百九十条所定の「違制罪」よりも法定刑の軽い新律綱領・雜犯律・違令条所定の「違令罪」の「輕キ者」に該当するものと判断し、新律綱領・雜犯律・違令条の「凡令ニ違フニ。重キ者ハ。答四十・輕キ者ハ。一等ヲ減ス。」および新律綱領・名例律上・加減罪例条第二項の中の「減ト称スル者ハ。本罪上ニ就テ減輕ス。仮令ハ。答五十ヲ犯スニ。一等ヲ減スレハ。答四十二坐……スルノ類。」なる規定を順次適用し、「本罪」たる「答四十」から「二等」を減輕した「答三十」を量定し、さらに、これら五名は、新律綱領・凶・贖罪收贖例図所定の「贖罪」に該当するものと判断し、新律綱領・凶・贖罪收贖例図の中の「凡贖罪ハ。……例ニ照シテ贖罪ス。庶人。過誤。失錯連累。其他不幸ニ出テ。事情憫諒ス可クシテ。的決シ難キ者モ。亦之ニ依ル。」なる規定を適用し、この「贖罪收贖例図」に附された「例」により、「答三十」に相当する贖罪金「二兩一分」を算定したのであろう。

四 最後に、岸田染太郎に対する司法省指令は、事実認定につき、前述の明治五年六月（日欠）附の岡山県の岸田に対する処刑伺に記された内容を認容し、犯罪の嫌疑はないものと判断し、「無罪」とする岡山県の量刑に対し、「伺之通」としたのであろう。

(五) 司法省の指令は、吉村新三および竹谷槌蔵については、岡山

県の求刑よりも格段に減軽され、吉村は、「准流十年」(同囚の脱獄を密告した功により減軽される前は「絞罪」であった)が「懲役九十日」と十等の減軽となり、竹谷は、「絞罪」が「懲役一百日」と九等の減軽となっている。けれども、吉村林之次、寺門石太郎、逢坂熊八、江見喜十郎および寺門久米吉の五名については、「無罪」とされていたものが、微罪とはいえ有罪となり、各「贖罪金二両一分」とされ、かえって加重されている。また、岸田染太郎については、量刑に関するかぎり、岡山県伺と司法省指令とが一致し、「無罪」とされている。

かくして、この司法省指令により、津高郡下諸村の騒擾関係者の刑は確定し、岡山県は、この指令にしたがい、直ちに刑の宣告ならびに執行を行ったものと思われ、前掲『岡山縣史料』四十三・縣治紀事の「騒擾」の項には、次の如き記事がみられる。

同年(明治五年——中山註)八月司法省ヨリ旧官員ハ無構旨達セラレ動揺巨魁ノ者ハ如左裁断アリ因テ各刑ニ処ス

(前略)

津高郡河内村之内山条平民<sup>(マ)</sup>

懲役九十日

吉村新三

第一百日

竹谷槌藏

贖罪金貳両壹分

吉村林之次

同

寺門石太郎

同郡同村之内富谷平民

贖罪金貳両壹分

逢坂熊八

贖罪金貳両壹分

同郡同村之内母谷平民  
江見喜十郎

同

寺門久米吉

(後略)

しかし、これらが、いつ宣告、執行されたのか、その正確な年月日については、資料を欠き不明である。ただ、この津高郡下の農民騒擾と同時期に発生した磐梨郡下および赤坂郡下の農民騒擾関係者に対する岡山県による刑の宣告が、明治五年十一月十日もしくは同年十二月十日に行われていることなどから考え、その前後のことであつたと思われる。

註

(1) いわゆる「悪田畑改正」作業の経過などについては、前掲・

太田健一「明治四年岡山藩悪田畑改正の考察」一九五―二一

八頁に詳しい。ちなみに、岡山県が新置されたのは、明治四

年七月十四日のいわゆる「廢藩置県」以後のこと(朝倉治彦

編『明治官制辞典』(昭和四十四年)六六頁)であり、作業

開始時の同年一月時点では、正確には岡山藩と言うことにな

るが、ここでは便宜上、岡山県としておく。

(2) 太田・前掲論稿・一九六頁、

(3) 太田・前掲論稿・二二―頁。

(4) 太田・前掲論稿・二〇五―二〇九頁および二一六頁。

(5) 磐梨郡下の農民騒擾については、前掲・拙稿「明治四年・

岡山県下磐梨郡農民騒擾裁判小考」六九―九八頁参照。

(6) 赤坂郡下の農民騒擾については、前掲・拙稿「明治四年・

岡山県下赤坂郡農民騒擾裁判小考」一九―四一頁参照。

(7) 二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣権大參事

成田元美・中村正記備前國津高郡赤坂郡磐梨郡上道郡村々出

訴動揺始末書」国立公文書館蔵・壬申<sup>五月</sup>「公文録」諸県

之部 全。

(8) 「明治五年三月十五日・吉村新三口書」前掲『岡山縣暴動

一件』。

(9) 「明治五年三月十五日・竹谷槌蔵口書」前掲『岡山縣暴動

一件』。

(10) 前掲「二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣権

大參事成田元美・中村正記備前國津高郡赤坂郡磐梨郡上道郡

村々出訴動揺始末書」。

(11) 前掲「二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣権

大參事成田元美・中村正記備前國津高郡赤坂郡磐梨郡上道郡

村々出訴動揺始末書」。

(12) 前掲「二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣権

大參事成田元美・中村正記備前國津高郡赤坂郡磐梨郡上道郡

村々出訴動揺始末書」。

明治四年・岡山県下津高郡農民騒擾裁判小考(中山)

(13) 前掲「明治五年三月十五日・吉村新三口書」

(14) 前掲「二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣権

大參事成田元美・中村正記備前國津高郡赤坂郡磐梨郡上道郡

村々出訴動揺始末書」。

(15) 前掲「二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣権

大參事成田元美・中村正記備前國津高郡赤坂郡磐梨郡上道郡

村々出訴動揺始末書」。ちなみに、前掲・長光徳和編『備前・

備中・美作百姓一揆史料』第五卷・一九二―一九二頁に

は、「明治五年備前國諸郡百姓共強訴之書類」と題した深井

文平宅放火前後の事情を記した次の如き文書が収録されてい

る。

「津高郡白石村大里正深井文平居宅え百姓乱妨放火に付、

兵隊銃発、死傷連署」

津高郡下芳賀村判頭

銃丸相請、一ノ宮村藤井玄良へ

板野滝蔵

治療相頼候へ共、終に落命。

歳四十九

同郡白石村

大里正久平門前にて即死。

竹三郎

疵所不知。

歳五十

同郡同村

秀次郎母

自分宅にて、疵所老筋。

歳六十余

大里正

同郡中原村

本家・納屋・土蔵とも六棟焼失。 深井文平

文平居宅東手にて、

国光財治

右の足少しかすり疵。

歳十七

同 郡横井上村

入江林平内別惣次郎伴

右の手疵。

元 藏

歳十九

同郡大岩村

傷

順 吉

同郡花尻村御雇人

則武勝五郎伴

銃創甲々連綿、五日朝死。

則武嘉五郎

十六歳

同郡菅野村の内

西菅野

股を被討抜即死。

嶋村三造

同郡富原村

金藤弥三郎弟

銃丸胸先に当り即死。

金藤周吉

四十九

津高郡白石村

当県管下村民共嘯集動揺之状、過日不取敢及御達候以後、

当四日に到乱妨益甚、大里正津高郡之内白石村深井文平宅

え及放火、暴動難制候に付、不得已発砲為致候所、死傷凡

九名余は即日致発乱候。右之事状に候故、役員之者共同夜

各所巡行、精々説諭相加候所、一先鎮定、尚歎願等申出候

に付、夫々理解申聞、昨今に至候ては先異状も有之間敷哉

に被存候。猶、不日軍事懸之者出府為致候間、事状詳細口

頭より御聞取可被下候。

(16) 前掲「明治五年三月十五日・吉村新三口書」。

(17) 前掲「二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣権

大參事成田元美・中村正記備前國津高郡赤阪郡磐梨郡上道郡

村々出訴動揺始末書」。

(18) 「十一・辛未十二月十二日・史官宛岡山縣当縣下村民徒党

事件御届」国立公文書館藏・辛未十二月『公文録』諸県之部

全。

(19) 前掲「二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣権

大參事成田元美・中村正記備前國津高郡赤阪郡磐梨郡上道郡

村々出訴動揺始末書」。

(20) 前掲「二十六・壬申六月(日欠)・岡山縣庁宛元岡山縣権



大參事成田元美・中村正記備前國津高郡赤阪郡(アヲ)警梨郡上道郡  
村々出訴動揺始末書。

(21) 「明治五年七月二日・吉村新三口書」前掲『岡山縣暴動一件』。

(22) 前掲「明治五年三月十五日・吉村新三口書」、前掲「明治五年三月十五日・竹谷槌藏口書」、「明治五年三月二十五日・吉村林之次寺門石太郎口書」前掲『岡山縣暴動一件』、「明治五年三月二十五日・逢坂熊八口書」前掲『岡山縣暴動一件』、「明治五年三月二十五日・江見喜十郎口書」前掲『岡山縣暴動一件』、「明治五年四月三日・寺門久米吉口書」前掲『岡山縣暴動一件』および「明治五年四月三日・岸田染太郎口書」前掲『岡山縣暴動一件』。

ちなみに、これらの「口書」によれば、各人の容疑は、次の如くであった。

① 吉村新三

真以難渋情願之義有之候得者穩ニ筋々<sup>ニ</sup>可申出之所無其義徒党相企出訴致し外多人數ニおゐてハ大里正里正共居宅乱暴或ハ放火致し候ニ立至り其節先立候もの見覺又者姓名等伝聞且俱々手を着暴動致し候義可有之<sup>ヲ</sup>再応御吟味を被り……………更ニ……………徒党相企出訴致し郡中を為騒候始末不埒至極之旨御吟味を受申……………候

明治四年・岡山県下津高郡農民騷擾裁判小考(中山)

② 竹谷槌藏

実々難渋歎願之義有之候ヘハ穩ニ筋々ヘ可申出之所無其義徒党相企出訴致し外多人數おゐてハ大里正之居宅乱暴或者致放火候ニ立至り其節先立候者見聞いたし且俱々手を着暴動致候義可有之<sup>ヲ</sup>再応御吟味ヲ被り……………更ニ……………徒党相企出訴致し郡中ヲ為騒候始末不埒至極之旨御吟味ヲ受申……………候

③ 吉村林之次・寺門石太郎

新三槌藏ヨリ談し及候節差留可申筈無其義林之次義者其外<sup>ニ</sup>も申伝ヘ俱々出願致し外多人數おゐてハ終ニ諸所乱暴致し候ニ立至り其節先立候者姓名等伝聞可居申<sup>ニ</sup>再応御吟味ヲ受……………更ニ……………右様談ニ請參郡中ヲ為騒候始末不埒之旨御吟味ヲ受申……………候

④ 逢坂熊八

村方一同之義ヲ申立候得其無謂徒党ニ與し出訴致し前段新三ヨリ出訴之義申談候旨外方<sup>ニ</sup>も申談可居申<sup>ニ</sup>再応御吟味ヲ受……………更ニ……………徒党ニ與し候始末不埒之旨御吟味ヲ受申……………候

⑤ 江見喜十郎

多人數之中ヨリ里抽ヒし新三俱々出張役人<sup>ニ</sup>歎願申出候其方故前段出訴之談示等致し可居申又多人數之者

諸所乱暴放火致し候節先立候者見聞致し且俱々手ヲ着暴動致し候義可有之<sup>ママ</sup>再応御吟味ヲ受……………更ニ……………多人數ニ與し他村迄出訴致し候始末不埒之旨御吟味ヲ受申……………候

⑥ 寺門久米吉

事實ノ委細不心得候へ共村方一同之義ニ付參会致し候様申立候得共新三同道ニ而參里候其方故前段新三<sup>ママ</sup>談合居申義又ハ諸所ニ而手ヲ着暴動致し候義可有之<sup>ママ</sup>再応御吟味ヲ受……………更ニ多人數之中<sup>ママ</sup>加里郡中ヲ為騷候始末不埒之旨御吟味ヲ受申……………候

⑦ 岸田染太郎

赤坂郡動揺之形勢相伝煽動為致候義ニ可有之と再応御吟味ヲ受候

(23)

「明治五年六月（日欠）・備前國津高郡河内村之内山条百姓<sup>ママ</sup>吉村新三外七人御仕置伺書」前掲『岡山縣暴動一件』。この伺書は、日附を欠くが、後述の如く、吉村新三について、逮捕、収監中の明治五年六月二十三日「晚七ツ時頃」、同囚の脱獄計画を見廻りの「番人」に密告した功により、「絞罪」から「准流十年」に減輕するべく、岡山県から司法卿江藤新平・司法大輔福岡孝宛に再伺いがなされていることなどから、それは、六月二十三日よりも前のことであろう。ちなみに、岡山県の処刑伺の中で、「絞罪」に相当するとされている

る吉村新三および竹谷樞藏の二名について、その理由につき、ただ、「不屈ニ付」と記すのみで、準拠すべき法令の条項を明記していないが、それは、適用すべき法条を、当時の現行法の中にみいだしえなかったためであろう。また、それゆえに、後述の如く司法省は、未だ草案段階の新律条例に準拠して処刑指令を作成したのである。

(24)

前掲『岡山縣史料』四十三・縣治紀事の「騷擾」の項。なお、この文書の末尾には、「元岡山縣樞大參事以下租税掛官員十五名連署」と記されているのみで、具体的な人名を欠くが、国立公文書館蔵『岡山縣史料』四十四・縣治紀事補遺の「騷擾」の項によれば、次の如くである。

|      |                     |
|------|---------------------|
| 樞大參事 | 中村 正起 <sup>ママ</sup> |
| 同    | 成田 元美               |
| 少參事  | 稻川 長典               |
| 同    | 河合 就義               |
| 大属   | 丹比 勝信               |
| 同    | 渡邊 能靜               |
| 樞大属  | 平野 伴則               |
| 同    | 大地 義英               |
| 同    | 赤堀 宏綱               |
| 租税掛  | 薄田 貞明               |
| 同    | 澤井 近信               |

租税監督

辻 定勝

同

高木 正勝

同

瀬崎 重教

同

井上 忠宗

ただし、この『岡山縣史料』四十四・縣治紀事補遺は、官員の進退伺の日附を「壬申五月」としている。また、前掲「二十一・岡山縣下人民動揺始末書并官員待罪」にも、同一の官職氏名が挙げられているが、「少參事稲川長典」が脱落し、十四名となっている。さらに、前掲・長光徳和編『備前・備中・美作百姓一揆史料』第五卷・一九〇六―一九〇七頁にも、この『岡山縣史料』四十四・縣治紀事補遺に挙げられた官職氏名が翻刻されているが、その出典を「縣治紀事」としている。

(25) 前掲「二十一・岡山縣下人民動揺始末書并官員待罪」。

(26) 前掲「二十一・岡山縣下人民動揺始末書并官員待罪」。

(27) 前掲「二十一・岡山縣下人民動揺始末書并官員待罪」には、このときの司法省の処分内容とおぼしき、次の如き資料が収録されている。

適律

地方官督撫ヲ失シ管下ノ騷擾ヲ醸スニ非ス特ニ糜藩立縣ノ際無知ノ小民巨魁ニ誑惑煽動サレ漫リニ暴行ヲ恣ニセシニ依リテ

無罪

中村正起 (ママ)

明治四年・岡山縣下津高郡農民騷擾裁判小考 (中山)

成田元美

外十三人

(28) 前掲「明治五年七月二日・吉村新三口書」。ちなみに、吉村の供述中にみえる守屋喜右衛門については、前掲『岡山縣史料』四十四・縣治紀事補遺の「処刑」の項の「明治五年中処刑」の中に、

十一月十八日

備中國賀陽郡板倉村農

斬罪

守屋喜右衛門

二十八歳

右者昨未年三月中生村ニ於テ窃盜相働候ニ付元岡山藩へ捕入咎申付候上ハ屹改心可致ノ処無其義尙当正月以来小田縣下又ハ当管内ニ於テ一人立窃盜相働就中当管下津高郡横尾村出生米蔵其外同類申合小田縣下并当管内所々農家へ押入白刃ヲ以テ劫シ亭主又ハ家族ヲ縛シ衣類金子共数多奪取剥へ入牢中破牢ノ示談ニ同意致ス始末不屈至極ニ付処之とあり、また、大頭鍬五郎については、同じく「処刑」の項の「明治六年中処刑」の中に、

二月十七日

第三十区一番小区備前國津高郡田地子村農

富次郎倅

斬罪

大頭鍬五郎

右者壬申正月十九日夕村方一同氏宮へ集合津高郡中田村新百姓ヲ惡シミ降参可為致様申立同村へ押行候趣承り候ニ付小銃携へ右人数ニ加り先立テ他村ノ者ヲ劫誘シ又ハ通行ノ婦女へ対シ空砲相発シ多人数中田村へ押懸候上同二十日同村新百姓繁森八十次居宅へ及放火卒ニ數軒延焼シ剩へ入牢中備中國賀陽郡板倉村百姓守屋喜右衛門大阪信濃橋通リ信濃町紀伊國屋平三郎河内國出生豊松甲州巨摩郡臺ヶ原驛出生若吉等ニ同意俱々破牢相企候始末不届至極ニ付処之

とある。さらに、大頭が関与した農民騒擾については、法務省法務図書館の所蔵にかかる「明治六年・第一号・岡山縣伺備前國津高郡田地子村農田原小四郎外十七名東常五郎発言ニ同意シ同郡中田村新百姓ヲ降参セシム可ク申称多人数ニテ同村居宅乱暴放火セシニ付処刑方ノ件」前掲『岡山縣暴動一件』に關係資料が収録されている。また、この資料は、原田伴彦・上杉 聡編『近代部落史資料集成』第二巻・「解放令」反対一揆（昭和六十年）三八九―四〇九頁に、その全文が翻刻、紹介されている。なお、この騒擾についても、その司法的処理の過程に関するかぎり、未だ闡明ならざる部分も多いこととて、後日、改めてこの問題について論ずることとしたい。

(29) 前掲「明治五年七月二日・吉村新三口書」。

(30) 前掲「明治五年七月二日・吉村新三口書」。

(31) 「明治五年九月二十四日・備前國津高郡河内村之内山条<sup>(ヤマ)</sup>百姓吉村新三御仕置伺書」前掲『岡山縣暴動一件』。ちなみに、この処刑伺では、吉村の量刑について、ただ、「守屋喜右衛門其外之者共破牢相企罷在候旨……訴出候付減死一等准流十年」と記すのみで、准擬すべき法令の条項を明示していないが、それは、前述の「明治五年六月（日欠）・備前國津高郡河内村之内山条<sup>(ヤマ)</sup>百姓吉村新三外七人御仕置伺書」の場合と同様、本件に適用すべき法条を、当時の現行法とりわけ新律綱領の中にみいだしえなかったためであろう。また、それゆえに、後述の如く司法省は、未だ草案段階の新律條例に準擬して処刑指令を作成したのであろう。

それでは、岡山県は、何を根拠に、「減死一等准流十年」と量定したのであろうか。それは、おそらく新律綱領・名例律下・斷罪無正条条中の「罪ヲ斷スルニ。正条ナキ者ハ。他律ヲ援引比附シテ。加フ可キハ加ヘ。減ス可キハ減シ。罪名ヲ定擬シテ。上司ニ申シ。議定ツテ奏聞ス。」なる規定により、まず、「絞罪」から「一等」を「減ス可キ」ものと判断し、ついで、同・名例律下・加減罪例条中の「減ト称スル者ハ。本罪上ニ就テ減輕ス。……惟ニ死三流ハ。各同ク一減ト為ス。仮令ハ。死罪ヲ犯スニ。一等ヲ減スレハ。絞斬ヲ分タス。流三等ニ坐……スルノ類。」なる規定により、「流三等」を選択し、さらに、明治三年十一月十七日、新律

綱領の頒行に先立ち頒布されたいわゆる「准流法」を適用して、「流三等」を「三等徒役 十年」すなわち処刑伺にいう「准流十年」と量刑した（内閣記録局編『法規分類大全』第五十七巻・治罪門2・治罪門三・監獄（昭和五十五年・覆刻）二八―三〇頁）か、あるいは、脱獄に関する

刑部省伺 三年九月十四日

上田藩支配所 栗原村無宿 富士太郎

右強盗賊八百九十両ノ罪ヲ以臬示断刑伺相済候上其段右藩へ相達シ以後於藩不行刑中隣牢之者破牢相企候趣知覚訴出候ニ付テハ寛典ノ赦例再伺出候ニ付法律取調候処清律曰他盜糾合シテ越獄スルニ畏懼シテ従ハス寔ニ抛テ首報シ因テ他盜立時ニ擒獲シ脱逃ヲ致サルヽヲ得レハ首報スル者ヲ以死ヲ減シ満流依テ死一等ヲ減シ満流ニ所断可致候此段再奏仕候以上

指令

伺之通

なる先例（内閣記録局編『法規分類大全』第五十四巻・刑法門1・刑法門二・刑律一（昭和五十五年・覆刻）一二五頁）を参考にして、「絞罪」から「二等」を減輕すべく判断した後、前述の場合と同様の手続により、「准流十年」と量刑したかのいづれかであろう。

(32) 「明治五年十月二十四日・吉村新三以下八名司法省処刑指

明治四年・岡山県下津高郡農民騒擾裁判小考（中山）

令」前掲『岡山縣暴動一件』。この指令は、発令年月日を欠くが、指令を記した司法省赤色八行野紙の欄外上部に「申十月廿四日付」と朱書されているので、これが、指令の日であったと思われる。なお、この指令の末尾には、「縣」、「青木」、「松本」、「松岡」、「江藤」および「判読不能」の各捺印が認められるが、これは、この指令の起案に關与した司法省の官員のそれであろう。すなわち、縣は、明治四年十月二十七日、司法少判事に任じられ（東京教育大学特定研究「日本近代化」研究組織編『任解日録』〈昭和四十五年〉三六二頁）、同六年一月現在も、その職にあった（明治六年一月・袖珍官員錄」寺岡寿一編『明治初期の官員錄・職員錄』第二巻・改訂版〈昭和五十五年〉二五三頁）縣 信緝、青木は、明治四年七月十二日、司法中判事に任じられ（前掲『任解日録』二一二頁）、同六年一月現在も、その職にあった（前掲『明治六年一月・袖珍官員錄』二五三頁）青木信寅、松本は、明治四年十一月七日、司法權大判事に任じられ（『太政官日誌』明治四年十一月七日条・橋本 博編『改訂維新日誌』第三巻・第一期・卷六〈昭和四十一年〉七九頁）、同六年一月現在も、その職にあった（前掲『明治六年一月・袖珍官員錄』二五三頁）松本 暢、松岡は、明治四年八月十日、權中主記に任じられ（『太政官日誌』明治四年八月十日条・前掲『改訂維新日誌』第三巻・第一期・卷六・三〇頁）、同五年二月現在も、

- その職にあり（明治五年二月改・袖珍官員録」前掲『明治初期の官員録・職員録』第二卷・改訂版・二三頁）、その後、時期は不明であるが、司法省十等出仕に任じられ、同六年一月現在も、その職にあった（前掲『明治六年一月・袖珍官員録』二五一頁）松岡守信、江藤は、明治五年四月二十五日、司法卿に任じられ、同六年十月二十五日まで、その職にあった（日本史籍協会編『百官履歴 一』日本史籍協会叢書175（昭和四十八年・覆刻）九〇頁）江藤新平のことであろう。
- (33) 農民騒擾と新律綱領・賊盜律・兇徒聚衆条との関係については、播磨龍城「現行刑法の兇徒聚衆罪」『龍城雜稿』（大正十三年）一一二頁、同「再び兇徒聚衆罪に就て（一）」前掲『龍城雜稿』三一九頁および同「再び兇徒聚衆罪に就て（二）」前掲『龍城雜稿』九一―一五頁参照。

- (34) 新律条例を最初に学界に紹介された藤田弘道氏によれば、新律条例は、明治四年に、それが編纂に着手され（藤田弘道「足柄裁判所旧蔵『新律条例』考（二）——改定律例の草案と覚しき文書について——」慶應義塾大学法学研究会『法学研究』第四十六卷二号（昭和四十八年）七四頁『新律綱領・改定律例編纂史』（平成十三年）一九八頁）、第一次草案（明治五年八月奏進）、再校草案（明治五年十月十三日進呈）、改正浄書案（明治五年十一月二十八日再進呈）、最終案（明治六年三月九日以降）を経て、その後、名称を改定律例と改

め、明治六年六月十三日、太政官第二百六号布告をもって頒布されたものである（藤田弘道『公文録』所載『新律条例』考——改定律例の再校草案と覚しき文書について——）手塚豊編著『近代日本史の新研究』I（昭和五十六年）一六八頁（前掲『新律綱領・改定律例編纂史』二七四頁）が、司法省が、本件の量刑に利用できたものは、司法省指令の発令年月日から考えて、第一次草案か、再校草案のいずれかであり、時期的にみれば、司法省指令の発令年月日と考えられる十月二十四日の直前である十月十三日に「進呈」された再校草案ということになるであろうが、同じ十月二十四日附で発令されたと思われる磐梨郡関係者に対する司法省指令の準拠条項が、前掲・拙稿「明治四年・岡山県下磐梨郡農民騒擾裁判小考」九六頁において指摘した如く、第一次草案である可能性の高いことから、ここでもとりあえずそれに従い、司法省指令の準拠条項は、新律条例の第一次草案であるとしておきたい。従って、本稿において新律条例を引用する場合には、前掲『新律綱領・改定律例編纂史』三五五―四三〇頁に収録されている新律条例（第一次草案）を利用させていただくこととしたい。

- (35) 磐梨郡下の農民騒擾関係者に対する岡山県による刑の宣告年月日については、前掲・拙稿「明治四年・岡山県下磐梨郡農民騒擾裁判小考」八九―九二頁参照。また、赤坂郡下の農

民騒擾関係者に対する岡山県による刑の宣告年月日については、前掲・拙稿「明治四年・岡山県下赤坂郡農民騒擾裁判小考」三四―三六頁参照。

### 三 あとがき

以上が、明治四年十二月初旬、当時の岡山県下の津高郡において発生した農民騒擾の概略およびその裁判の経過である。この騒擾に関しては、本稿の「はしがき」においてもふれておいた如く、岡山県地方の郷土史関係の文献を中心に、多数の文献がとりあげてはいるが、いずれも簡単なものであり、とくに、その司法的処理の過程については、まったくといってよいほど未開の分野であった。そこで、本稿においては、前掲『岡山県暴動一件』に収録されている本騒擾に関する新資料などを利用し、騒擾において中心的立場にたち、検挙され、裁判を受けた容疑者の容疑事実などを明らかにするとともに、その裁判の経過についてもできうるかぎり明らかにすることにつとめた。

資料収集も不十分のまま、その貧弱な資料を基礎に、あまりにも推測をかさねすぎたことをみずから認めざるをえないが、この拙き小稿が契機となり、岡山県地方において新たな資料が発掘され、この騒擾の内容が、より一層鮮明になることがあるとすれば、望外の倖である。